慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	社会思想家としてのジョン・ラスキンの生涯（五）
Sub Title	
Author	奥井, 復太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1923
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.17, No.5 (1923. 5) ,p.739(67)- 751(79)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19230501-0067

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

がカントと同じく嚴正中立の批判的立場を飽く迄も守らざる以上『カントに歸れ』の言は何度でも反覆さるゝに相違ない。西田幾太郎氏の主張する如く科學をも一種の內面的妥當性と見做し、科學、文化、藝術、宗教等を同一平面上に立たしめんとするのは既に對他的妥當性を離れたる純粹經驗の內面的妥當性の見地に於てのみ主張し得るに過ぎない。

五

自然科學を科學の一切として、そして經濟學の科學的地位を見るとどうなるか、經濟學は元來學として自然科學に近くに從て內容が貧弱になり學としての形式は整ふも學としての價値が薄れて行く傾向がある、そこで經濟經驗を經濟經驗として完全に把捉するには如何にす可きかの議論が生ずる譯である。

勿論經濟經驗に對して文化的取扱を主張する左右田博士の所論は稱揚に價する一解見であらう。乍然、私は文化としての經濟學以外に價値のOrganismとしての經濟學を考へ得ると思ふ。此の價値のOrganismを更に普遍化すると從來の自然科學的經濟學になるので、經濟學が自然科學的經濟學となる前期、それが即ち價値體系としての經濟學である。即ち文化としての經濟學と自然科學としての經濟學との間に體系としての經濟學が這入ると考へる。即ち左の如し。

→文化的經濟學
→體系的經濟學
→自然科學的經濟學
　非學としての經濟學（內面的妥當性）
　學としての經濟學（對他的妥當性）
　自然科學は飽く迄も連絡を破壞して同一平面に等一的に總てを見て行こうとするのであるが、之と反對に今その自然科學が無視しようとする連絡を中心として之に最も注意を注いで一個の有機體として經濟生活を見て行こうとすると體系的經濟學が生れるのである、勿論斯る事は學としての權威から遠いこと恰も文化が遠き如きである、然しそれだけ內面的妥當性はあらねばならぬ。

兎に角、私は資本主義と云ふことを此のOrganismの根本にとり入れて連絡を把握し、資本主義的構造、即ち財界に達しようと思ふので、私の財界學が經濟生活の理解に役立つ時に世間は之を學としての妥當性を與へて稱揚するかも知れないが學の眞正なる意味に於て學ではあり得ない。

私は經濟主觀として資本主義を假定し、そしてそれに依て與へられたる經濟生活を統一して資本主義的構造即ち財界の觀念に達しようとするに過ぎないのである、此の資本主義的構造即ち財界の觀念體系が現在の經濟生活の理解に役立つことは現代の經濟生活がそれだけ資本主義的特色を帶びて居ることを裏書きするに過ぎない、學としての權威からで夫はないのである。

一九二三、一、二〇（コロンビヤ大學圖書館內）

社會思想家としてのジョン・ラスキンの生涯（五）

奧井復太郎

一八

一八四〇年の春過勞と失戀との齎した病氣はラスキンから、あらゆる光明と希望とを一時に吹き消して、其のあとには陰慘なる風が吹き荒むだ。彼は如何にして又何處に其の前途を見出

す可きか頗る不安の情に包まれてゐた。併し彼の健康が回復せらるゝ限り、彼の撰ぶ可き道は既に、その準備時代を通じて定められてゐたと云ふも何等疑無き所であらう。此の眞の使命に應じて立てる彼の姿こそ、幾多の傳記記者が最も愉快に又華々しく語らんとする所である。實に『今や吾人は自然並びに美術の使徒としての若きラスキンが生活の門出に達したのである』(Harrison,— p. 41) 斯くて吾人は極めて赫々たる彼の生活の記錄を有するのである。

五月、彼の吐血はラスキンの一家を極度の憂鬱に陷れたが彼の病のよくなるに連れて彼等は暖かき南國に療養するの計畫を立てた。斯くして一八四〇年より翌年の中頃に亙る南伊太利の旅行が以前の如く家族連れで企てられた。怖ろしき記憶に觸るゝ巴里を避けつゝ彼等は伊太利に赴いたが、その途の風光も常の如くにラスキンの心に感激を與へ得ざりしのみならず寧ろ餘り面白い旅行ではなかつたらしい。(自叙傳第二卷二二・二三・四四の各節、エフ・ハリソンのラスキン傳三六頁參照) 彼の自叙傳中には到る處に當時の苛ら立てる感情を示すものがある。十一月の末、目的地の羅馬に着いた時、此の「近代的大都會の大通り」に入つて旅宿に着いた時の彼の感情は極めて疲勞し且つ氣むづかしかつた、曰く『陰鬱なる旅行が更に一層陰鬱なる休息を以つて』終へたと(自叙傳第二卷三〇・三二各節參照)。宏大と云ふ事に驚かぬラスキンには羅馬は殆ど大した興味を與ふる事なく、又 St. Peter のドオムもヴァティカンの畫廊の作品も彼の注意を惹くには足りなかつた。(前掲書三二・三四の各節、羅馬の滯在に就いては更に四五節を參照) 彼及び兩親は Henry Acland の紹介狀を以つて Joseph Severn & George Richmond

等の滯在中の英國紳士と交際する事になつたが羅馬、及び伊太利の藝術等(一ミケランジェロを除いては)に對するラスキンの批評は是等の人々との間に可なりの激論を惹起さしめ、彼が容易に下らざる不屈な態度は彼の兩親に又一つの懸念の種と考へられてゐた註(自叙傳第二卷、三六節)

註　伊太利藝術に對する知識の熟せざる當時のラスキンにとつてはミケランジェロのみが其の偉大を認められてゐた。『Genoa に於いて私は初めて、ミケランジェロの手になつた圓いピーエタアを見た。之れが全伊太利の美術に於ける私の手引であつた。蓋しこの時には私は未だ、ルツベンス、ヴアンダイク、ヴェラスケスを除いては、伊太利の繪畫に就いて寸毫も知識を持つてゐなかつたのである』。(自叙傳第二卷二四節)

『凡べての宗教的美術、壁畫、テムペラ畫等の價値は丁度是等のものが伊太利人自身にとつて零であつた樣に私にも無意義であつた。平塀や埃だらけなオリーヴの樹のある周圍の景色等、たゞ一人の師ミケランジェロを除いては全部が私の感情を背ら立てたり倦怠せしめたりするものばかりであつた。

私は彼の中に希臘人に於けるよりも優れたる感情と人生とが存在し、又ルツベンスには缺けてゐる正確と意義とが包まれてゐる事を直に認めた。誰でもミケランジェロが世界に於いて一番立派なものであると云ふ事を私に就いて誓つて吳れるので、彼を好む事を私は極めて篤に思つてゐた』(自叙傳第二卷二八・二九節 Florence の條) 更に羅馬に於けるラスキンのミケランジェロ研究並びに當時の建築觀に就いては Library edition, vol. xxxv p. 616 以下に興味ある彼の記錄を見出す。

ラフアエル其他に關しては前掲自叙傳 Florence の條に、Uffizi の蒐集中にあるラフアエルの St. John を稱しては「眞黑な餘大の一作」(a piece of black bombast)と呼び、蒐集そのものを指しては、「不體裁なる雜集」と貶してゐる。羅馬の畫廊研究(自叙傳第二卷第三四節)では次の如き結論に達した。

『凡べての偉大なる宗教畫、Perugino の控間、Augelico の禮拜堂、Sistine 教會堂の全下部階層等も私には全く無益なものであつた。何人も嘗て私にそれ等を觀よと命じたものはない、私も自から其等を研究するの氣持を有した事はない。Sistine 教會堂の屋根は觀よと誰れでもが私に告げた、私も其れを好むだ。併し誰れでもが又私に、Raphael の "Transfiguration" Domenichino の St, Gerome を觀よと語つた。又私は熱心に命ぜられた如くにやつた而して

私は何等孤疑する所なく、Domenichino の作は價値なき繪であり Raphael の作は一個の醜惡なるものであると斷じ、爾來繪畫の問題で、自分がそれに同意しうるものに非ざる限り、誰れの云つた事にも注意を支拂はなかつた』（前掲書第三四節）

又別の機會に於いては次の如く述べてゐる（自敘傳第二卷第三七節參照）

『其以來、ラフアエルの情緒とチチアンの色彩とは共に、よし全然私の方向と一致せざるものに非ずとするも、尚ほ私の理解し難き所であり、ヴアテイカンの彫刻室は單に惑亂と苦惱とを與ふるに過ぎずと考へたので、自分自身を制する事が出來ず、羅馬で觀た所のものを獨自の表現法で寫生する事に決め、Raphael, Titian, Apollo Belvidere 等を一團として之れに反抗するつもりで、先づ猶太人の居住する區で古い窓から垂れドがつてゐる古布の愚實なる習作を試みた。』

併しラスキンが伊太利の藝術に對して未だ充分眼を開いてゐなかつた事は自敘傳の此章（第二卷第二章羅馬）の諸所に述べてゐる所である。（Cf. § 24,（at this time I understood no jot of Italian paintings）, § 27 (total ignorance of what early Christian art meant, and of what living sculpture meant, were first pierced by vague wonder and embrassel awe, ...), § 29. (all sacred art, ... mere zero,) § 56, (I know absolutely nothing of architecture proper ....). Also see Library edition, vol. xxxv, p. 293, note 1）既に引用せる F. Harrison の言葉（本誌第十七卷第三號一三五號參照）は是等の關係に就いて云はれるのである。E. T. Cook のラスキン傳に於いては第一卷一一四—五頁を參照せよ。

故にラスキンは斯くの如き批評の後に『其の當時全く輕蔑し、迷怪なる色彩と考へてゐたものが今や、多くの年月の後には、私の生活上に大なる又美しい影響となつて來た』と附言してゐる（Praeterita II, § 38. Cf. Library edition, vol. xxxv. p. 293, note 1）

羅馬に於ける彼の健康は多少回復の徴を示したので今迄沈みきつてゐた彼の父も平常の快活に戻る事が出來た。ラスキンも、多くの伊太利人に混る美しい英國の一少女（Miss Tollemache 後の Mrs. Cowper-Temple）の姿を遠く眺める爲めに屢々教會の音樂禮拜に出かけるの餘裕を持つに至つた（Praeterita II, § 39）併し羅馬に於いては遂に彼の歡喜に充てる光明は求め得られなかつた（Op. cit., §§ 45, 46）一八四二年早々彼等は Naples に赴く事となつた。

此の旅行に於いてラスキンの自然風物の觀察は極めて驚く可きものがある。E. T. Cook は畫筆を持てる畫家とペンを持てる其の解說者とがその現はさんと欲する所に於いて微妙にも一致せるに驚いてゐる（The Life, vol. I, p. 115）彼の觀察、悉くタアナアが描かんとする所のものであつた。Sestri に於ける雲の變化、La Riccia の谿谷、Mola の霧深き旭日、Naples の St. Elmo に於ける光の美是等に對してラスキンは『後に「近世畫家論」の記述の基礎となつた不斷の觀察』を注いだのである。（Cf. Praeterita, II, §§ 44, 48, 49. Cook—The Life of Ruskin, vol. I, pp. 115-116）

然かもラスキンは Naples に於いても尚ほ倦怠を感じ之れに苦んでゐた。（自敘傳第二卷第四九節）此頃彼は病氣から來る無氣力に惱まされてゐたが（Cook—The Life, vol. I, p. 113）茲に漸く彼は自己の無氣力に對する強い自咎の念を感じ始めたのである。彼の自敘傳には此の時の感情が次の樣に誌されてゐる。

『此の Naples に於いて、又火山の電光の如き閃きが私の上に下つたのであつた。其の當時の私の病氣や憂鬱の狀態では全 Naples も私にとつて無用であり又私の入り難くいものであると云ふ感が非難と共に感ぜられたが、今や繭狀の包覆が此處、其處で何かの目的の爲めに自から裂けはじめ出した、かくして私は、南方に霞み消え行かんとする Monte St. Angel の最後の姿に、將來自分の進路を改善しうると云ふ微かなる考を懷きながら別れを告げた』（自敘傳第二卷第五一節）

Albano に於けるラスキンの病氣の再發は一時彼の兩親に心配を與へたが直ちに恢復して彼

等は一旦羅馬に戻り更に復活祭を終へるや其地を去り Terni, Foligno, Perugia, Arezzo を經て Folrence に赴いた　北へと赴くに從つてラスキンの心胸は漸次回復して來た（前掲書第五三節）Venice は彼に『都會中の樂園』と映じ全伊太利中ヴェニスに比すべき何ものもないと觀じた（Cf. Præterita, II, § 57. E. T. Cook—The Life., vol. I, pp. 118-119）此の地に於ける彼の光の研究は後に又 Modern Painters 執筆に際して役立つたものである（自叙傳第二卷第五六節參照）此處より彼は更に Padua, Milan, Turin を經て Susa に至つたがアルプスの視界に近づくに及んで彼の健康は益々よくなつて行つた。而して一八四一年六月二日の朝六時 Lans-le-bourg に於いてラスキンは遂に再び彼の世界と生命とを認め得たのである。

『私は自分の生命を再び見出したのであつた—然かも其の上乘なるものを悉く。宗教、愛、禮讃、又は希望等の德に就いて私に敎へられ或ひは私の最もよき資性によつて感ぜられてゐたものが直に再び燃え上つたのである。自己の意思と將來運命によつて許容せらる可き援助とによつて私の仕事の進路は定められた。私は感謝の念を懷き乍ら山を下つて父母の所へ行き健全に進みうる確信のついた旨を彼等に語つた』。（自叙傳第二卷第五七節）

彼の自叙傳第二卷第三章の終りには Geneva の或る寺院に於いて彼の奮起を促す自咎の念が不思議にも二年續けて同じ場所で起つた事を誌し其が殊に此の翌年一八四二年に起つた感情が正しく『タアナアの仕事』の起原となつたものであると述べてゐる（自叙傳前掲書第五八節並びに第七八節、Library edition 第三十五卷三一六頁參照）

遂に斯くの如き心持を懷けるラスキンを中心とした旅人の一行は四一年六月二十九日に Rochester の家に着いた。Lans-le-bourg の朝以來ラスキンの山嶽に對する感情は極めて強く遂に八月匆々 Wales 地方に友人 Richard Fall と共に初めての「獨り旅」を企てた。此の旅行に於いてラスキンは一八三一年 Wales 旅行に於ける Hereford の印象を忘れ難く直ちに其處へと目指したが Leamington に於ける醫師 Dr. Jephson の勸告と其れに從ふ可き父の命令との爲め遂に同地に六週間滯在する事となり、同醫の看護の下に極めて平和な、又規則正しい生活を送り彼の疾患の根本的治療を計つた。Euphemia Chalmer Gray と云ふ少女に（後に間もなく語られるであらうが此の少女の名をこそ記憶せらるゝ必要がある）King of the Golden River と云ふグリムとディッケンズと彼自身のアルプスの感興とを合せた御伽噺を書いてやつたのも此の頃の事である。六週間を經て彼は Wendlebury にある W. Brown の家庭に暫く暮した後來春オクスフォードの學位をとる可く O. Gordon の援助の下に其の用意をする事となつた。

十九

一八四二年は多くものが曉雲に包まれてゐる樣な貌で開かれた。此年タアナアは彼の自然觀を感興の乘るまゝに自由に現はした所謂 delight drawing を作つたが其の中にラスキンが認めてタアナアのアルプス作品中最も傑作と稱せらるゝ Splügen の畫があつた。彼は之れを手に入れんと欲したが折惡しく父不在の爲め遂に Novur の Munro 氏に買はれてしまつた。ラスキンは之れに對して『其の畫は私が求めるのが極めて當然なのであつて他の何人が求め樣とも爲めにならぬものである』と主張して父親に其の購入

を乞ふたが相手の Munro 氏が其の値段を八〇ギニから四〇〇ギニに上げた爲め交渉は不調に終り其の結果此の交渉を中心として父子共頗る面白からざる感情を懷くに至つた。

（"Modern Painters" vol. II, Epilogue § 3 (1883). Collingwood—"The Life and Work of John Ruskin," vol. I, pp. 100-101. E. T. Cook "The Life of Ruskin," vol. I, pp. 125-126. "Præteria, II, §§. 71-73)

併し此の繪は遂に一八七八年になつて彼の友人達から彼の所に贈られた。タアナアの是等の作品のラスキンに教へた所は『近世畫家論』第一卷第三章第二十一節に現はれてゐる。其は次の事と相合して考へらるべきである。

タアナアの極めて自由なる想像力に富む作品はラスキンに深い感銘を與へた。タアナアが傳統的因襲を輕視して直接自然の靈感に觸れて描ける所極めて偉大なるものがあつた、ラスキンは茲に於いてタアナアのコンポジッションの意義を解し得たが更に此の四二年はラスキンにとつて貴重な一啓示を與へたものである。同年五月の頃 Tulse Hill の下なる Norwood 街道を歩いてゐた時彼は不圖、籬の茨の幹に纏へるキヅタの如何に其の形の美なるかに驚かされ之れによつて彼は如何に微妙なる構成、排置が自然そのものゝ手によつてなされつゝあるやを覺り得た。かくて彼は、自然の與へしまゝの事物に就いて描畫する事を何人も教へなかつた、彼の過去を回想して其の爲めに多大の年月が空費されしを知り、是等の時代に彼が僅かにも殘せるものは各地の單なる記錄に過ぎずして一つの美術としての繪畫を學ばず、一石、一葉の中に存在する美すら見出す能はざりしを悟つた。かくして彼は云ふ

『私は此の發見によつて、然かる可き程、壓服されもしなかつたし又其れ程向上もしなかつた、が、たゞ其れが私の蛹の樣な睡眠時代に終りを告げさせた。爾來私の進歩は、遲々たりとは云へ、確實なるものであつた』（自叙傳第二卷第七三節）（註）

註　此の點に關しては同第五六節及び『近世畫家論』第二卷エピイログ第二節、參照。

此の啓示の價値は更に再び Fontainebleau の森に於ける其れと比せて極めて重要なる意義を有せるものである。『近世畫家論』第一卷の結論に於いてラスキンが風景畫研究者に與へたる教訓は誠にかゝるラスキンの實感から發するものなのである、詳しくは Collingwood—The Life and Work of John Ruskin, vol. I, pp. 101-102 參照。

此の事の一、二週間後のラスキンはオクスフォードに赴いて學位試驗を受けた。彼のラテンは此の試驗の通過を怪しませた程不出來であつたが神學、哲學及び數學の秀でたる成績は名譽ある Double-fourth の學位を彼に授ける事となつた。

斯くして變化あつたオクスフォードの學生々活も終つて茲に又如何になす可きかの將來に關する問題が彼の心に生じた。

『自由を取り戻した感に於いて幸福であつたが、併し其を如何なる用途に用ふ可きかに就いては頗るに疑惑に充ちてゐた。茲に滿二十二歳の、かく〳〵の能力を持つた——然かも其の能力も、分析的能力以外は何づれも第二流的のものであり又分析的能力にした所で他の能力と同じく未發達であり且つ其れを計る手段さへ持たない始末で——斯くの如き能力を持ち、更に之れまでは自分の良心に咎めながら耽つてゐた、かく〳〵の趣味を持つた、私と云ふものがあつた。然かも其處には又自己並びに兩親と、又日を追ふて益々漠となり行く「永遠の法則」の影とに對して微かに感ずる義務の念があつた』（自叙傳第二卷第七四節）

彼の將來に就いては、彼の父はラスキンの欲する儘に爲さしめたであらう。併しラスキンは先づ夏期の旅行を企てゝ瑞西に赴き主として

Chamouni に滯在して山嶽の空氣を吸ひ、Mont Blanc の岩石を研究する宿望を果し、その上彼の將來を考へようとした。

Chartres から Fontainebleau に至る平原の横斷は北に巴里を控へてラスキンの心を惱ましたが、一日 Fontainebleau の森の中に於ける靜かなる觀察と默想とは再び彼に力强き自然の啓示を與へた。路傍の堤に横り無氣力に惱まされてゐた彼が何氣なく青空に聳えたハコヤナギの樹を寫生するに及んで、彼の倦怠の情は去り美しき線が其の紙の上に熱心に引かれはじめた。不思議にも其等の線は人々の知り得ざるより麗しき法則によつて紙上に「排置」せられて行き遂に其處に一本のハコヤナギが描かれた。ラスキンが得たる所先きの Norwood のキヅタに於けると等しきものがある、併し更に此の時に於いては彼は次の如く考へた。

『Norwood のキヅタは此の最後の方法に於いて私を黜けてしまつてはゐなかつた。蓋し人々は常にキヅタは裝飾的の植物であると感じ其が時々美しくあらはれるのを豫期してゐるからである。併し森の中のあらゆる樹木が（何故ならば私の描いた小さいハコヤナギの樹は其の數百萬中のたつた一本に過ぎないと私は確に思ふが）そが凡べて美しいものであるのだと云ふ事は――ゴシックの花形細工よりも、希臘の壺瓶の彫像よりも、東洋の最も優雅なる刺繍師が縫箔し得んものよりも、西歐の最も技巧に富める畫家が描き得ん所よりも――美しいものであると云ふ事は私の持つてゐた以前のあらゆる考へに終結を置いたものであり新しきシルヴァンの世界に對する識見を開いたものであつた。

『單にシルヴァンの世界のみではない。嘗てはたゞ荒地とのみ眺めし森林もその美に於いて、雲を導き、光を分ち、波を振動せしめる法則と同じき法則に一致せるを其の時私は覺つた。「神の爲したまふところは皆その時に適ひて美麗かり」と云ふ事は爾來私にとつて人間の心とあらゆる物體との間に存する羈絆の解釋となつた。……」（第七七節）

斯くの如くして運命がラスキンの奮起すべき時を下す以前に於いて彼の武裝は整つた、彼が美術批評家として論戰に出でんとするのは最早たゞその命令の下るのを待つばかりであつた（E. T. Cook－The Life, vol. I, p. 127）前きに誌した如く Geneva の寺院に於いて再びラスキンの心に彼の奮起を促す感情の閃めいたのはかゝる時に於いてゞあつた（自叙傳第二卷第七八節）が遂に彼を敢然立たしむ可き挑戰狀は屆けられた、そは一八四二年再びタアナアに加へられたる嘲弄と下等なる戲談に充てる批評が Geneva に於ける彼の手元に、W. Harrison の送れる Literary Gazette（或は Athenæum）誌と共に屆いた事である。（Cf. Cook－The Life of Ruskin, vol. I, pp. 127-129）

彼の蹶起を促す鐘は既に鳴り響いた。彼は一小冊子を以つて彼の心胸に燃ゆる所を全部云はんと欲して Geneva を去つて Chamouni へ赴いた。併し其の計畫に着手するや彼の云はんと欲する所は極めて多かつた、從つて小冊子として纒めんとする企畫は一大論文に變ぜざるを得ないに至りかくしてタアナアの辯護は同年の秋自宅に歸つて爲す事に決定した。（註）

Chamouni の生活や此の旅行などに就いてラスキン自からも充分の記錄のないのを遺憾としてゐる、Chamouni に於ける彼の歡喜と驚嘆にみちた生活は彼が知人に發した手紙の中に窺はれる。彼の詩作に就いて W. H. Harrison に與

へた手紙は彼が「雪と花崗石」の觀察に熱中してゐて極めて多忙な生活を營んでゐる樣を告げる(Cf. E. T. Cook—The Life of Ruskin, vol. I, pp. 129-130 又 E. T. Cook は一八四四年の同地に於けるラスキンの日誌を載せて彼の生活を窺ふ一端としてゐる、Library edition, vol. III, pp. xxv-xxvii 又此時彼には多少の詩作もあつたが、—例へば Walk in Chamouni の如き、——同地の風景や其の印象を寫すに於いては寧ろ手紙——例へば Rev. W. L. Brown に與へた——の中に眞のラスキンが現はれてゐる。然かも其が軈て Modern Painters の中に纒められたのである。(Cf. E. T. Cook, op. cit., p. 138)

註　一八四四年三月十日附の O. Gordon 宛の手紙にラスキンが Modern Painters の第一卷を書くに至つた動機と其の計畫に就いて吾々に詳細を知らしめる。以下其の一部を抄出すれば次の如くである。

『……一昨年の夏——ゼネヴァに滯在してゐたある日曜日の事を憶ひますが——Royal Academy の評論を載せた一紙をロンドンから受取り其れに就いて私は非常に奮慨しました。其日の午前一教會で、誠に奇妙な事ですが、聽て來らんとするものに就いての私の決心は全部、やらうか止さうかと云ふ事が間遠もなく常に教會できめられるのです、私は連續の間に凡べてを計畫するのですが、私はパンフレットを書いて批評家を追り込めてしまおうと決心したのです。月曜日には Chamounix へ赴き、火曜日は朝四時に起床して八時迄にパンフレットを書いて了ふと思つたのです。で仕事に取り掛つたのですが旭日が Dome du Goûté の上に映り初めたので　落着いて仕事が出來ず——散歩をしようと外出しました。水曜日にも同じ事が起つたので雨降りの日迄パンフレットの仕事を延ばす事にしました。所が雨天の日が仲々來ない——その内に到々書き始める前に一時間や二時間では消化(コナ)しきれない程の材料が集まつてしまつたので家へ戻る迄でパンフレットの計畫を延ばす事になりました。ラインを下るみちすがら私は常に構想にふけてゐましたが、美術上の問題の論證は思つてゐた程容易な業でない事がわかつてパンフレットが一卷の書物にと變りました。所が一卷が中半も纒まらぬ内にヒドラの樣に三つの頭に殖えて其の頭一つゞつが一卷の本となる事になりました。斯樣に規模を大きく企てなくては到底何にも出來ないと云ふ事がわかつたので愈々此のヒドラの頭の角をつかまえて、風景美術に關する完全な論文を書かうと決心しました。』(Library edition, vol. III, Letters on the "Modern Painters." p. 666.)（更に一の計畫に就いては Library edition, vol. III, pp. 680-684, Appendix V.參照）

斯して彼はライン、フランダアスを經て Herne Hill の自宅へ歸つて熱心に Modern Painters の第一卷を書き始めた。

此年の秋十月、ラスキン一家は Herne Hill の家を引き拂つて Denmark Hill の宏壯な屋敷へ移つた其の轉居の顚末や新しい屋敷の廣い事風景の佳い事等は彼の自叙傳第二卷第七九節以下並びに第八章全部に描れてゐるが併し此の新居に於けるラスキン一家の人々は『以前程に幸福でなく又打ち寛いだ感は毫も無かつた』一八四三年から一八四四年の大陸旅行前迄の記錄は上記の第八章並びに第九章(Modern Painters 出版の影響に就いて語つたもの)を除いては自叙傳中極めてその記錄に乏しい。第八十二節の一頁が僅に其の概略を記錄するのみである。併し一八四二年の冬から一八四三年にかゝる期間は、當時の美術界、文學界に一大波瀾を引き起さしめた、彼の生涯中最も特記せらるべき期間である。

以下『近世畫家論』第一卷の發行と其の影響、更にラスキンの思想の發達とに就いて語らう。

「人口論」批判（下）

津田誠一

九

マルサスは、「貧民の貧民たる原因は貧民自身に存し、隨つて其境遇改善の手段は彼等の掌中に在りて他の何人の掌中にも在る事無し」と云ひ、現存社會組織の弊竇を否定し富者階級の救